



北窓瑣談

後編卷之四

234

8+2





北窓瑣談後編卷之四

梅華仙史橘春暉著



一算術さんじゆつ中邦近世きんせい精せい密みつのおりき。享保きやうほ中根氏なねうぢより至
 後ご關氏せきのおりき。大の精せい密みつをかへた。又久苗ひさな米候こめごころ備候びごころの御ご房ぼうより
 て算さん学がくの長ながしくの著書ちやくしよ多おほし。近年きんねん系師けいしの西傳さいでん右衛門ゑもん
 村井中漸むらゐなかのぞの文字もじの力ちからありて善よく算法さんぽうの精せい一いつ。正木ただき願平のらへい三木
 善よ右衛門ゑもん又算術さんじゆつの名な多おほし。三木さんき孫まごあらは余あま毎度まいど律りつ算さん論ろんせ
 小こ算さん上じやうのおりき。新あらたの法ほう戎えい佐さ重しげのおりき。算さん戎えい布ふのおりき。其その達たつ者ものなりし
 用もち戎えい算さんのおりき。唐土たうど八祖はつそ沖おき之の密みつ算さんより算法さんぽう精せい密みつのおりき。之の
 小こ圓えん法ぽうのおりき。之の遂すい不ふ算さん一いつ極きくのおりき。之の能あたりき。之の算さん三さん二に六ろく

或ハ三一四と色々小論ごんされも極きま免る所有り。是こゝ圓まと
陽ひかりのく物ものの美教びきょうのわづらうものありし

一月前いっげつぜんに見み事ことハ珍めづるもの奇きとせ。後のち忠臣孝子ちゅうしんこうし異い統とう
奇き又またありても只一座いざの傍かたわら活いれ乃すなはち皆みな一いつて。尚なほ時とき皆みな人の知し
きるるあ様ようむああ純じゆん録ろくさるに不及ふたふたとて年月としげふ過する物もの人
も我われも皆みな志しきとてけりけり世よの残のこり傳つたへぬやうな事ことのあり。余
是こゝ我われ惜おしむるあ珍めづる傳つたへぬやうな事ことのあり。但たゞ古人こじんの褒ほ貶てん
成敗せいばいの儀ぎ論ろんをハ古書こしょありきとて人の心こゝろを取捨しよてつハたや
かきむ筆ふでを勞らうらふ不及ふたふた。東坡とうは抄せうさむりの才子たうしなりしと鬼角きかく
小古人せうこじんを評ひやう儀ぎをさるる好このきり後のち世よより評ひやうされしものあり

儀ぎせうとよのありやうやう世よの益えきあるやうもさるるぬもの

一層いっそう土つちの硯石えんせきハ眼がんとさるるあり。石いし早はやのあり珍めづるを。眼がん中ちゆう

死し眼がん活くわつ眼がん涙なみだ眼がんありし。早はや光澤くわうさくあり周回しゅうかいき

ざりし。たゞ我われ寶たうも。日本にっぽんの硯石えんせきハ眼がん我われ珍めづるをさるるや

ぞ。それれ日本にっぽんの石いし乃すなはち眼がん我われさるるや。但たゞ石いし王おう寺じ石せき

かじられた石いし乃すなはち眼がんありて石いし王おう寺じ乃すなはち妙めうとて。然しかもどももの

白筋はくきんの亦また不ふ堅けんく。一いつ層そう我われ磨まの妙めう成せい二に近ちか来きハ石いし

王おう寺じ乃すなはち石いし此こゝ白筋はくきん無なる。我われ最さい珍めづるをさるるや。乃すなはち石いし乃すなはち

眼がんも實じつハ石いし乃すなはち瑕きずとらふ。

一硯いっえん材ざい乃すなはち藤ふじ列れつ屋やく久く嶋じま石いし乃すなはち一いつとを。石いし乃すなはち一いつとを。乃すなはち一いつとを。

あり又善澄む事なし。を次々山城の石王寺。若狭の鳳足
甲斐の餘畑。土佐乃昔石。美作の高田など。硯石乃上品也
赤馬關ハ上品あれども堅たぬ過る善澄む乃難あり。加茂
川石又堅くし赤より玄しく大硯ハ用らざし。近江
乃高嶋ハ石下品かれもよく善澄磨。大硯ハを便利也
殊小石多し善くして價も下座あり。世間ハ益
一の石なり。嵯峨石ハ多しれども玄下品ふし。用る小硯を
一磨土あり。端の貨物或三階小し。最上の物或西洋貨と稱
し。唐土より西の西くハ後を天竺意機利私イスハヤ阿
蘭陀など。何れも價の高く上品か或は中品也

唐土めく商の最下品或東洋貨と稱し。日本へ渡ると

云。日本も只價の下座なる物或は中品なりとぞ

一小城某の家中ハ何の久壽とる人有り。暑の頃役所より
出。政ありし。修日の勤勞ハ夏日の事あれ。倦つて心也
あし。夕あり。家ハ賑わひ。修日のつれを休ん
座よつき。おれ。我妻の顔牛のどし。久壽大ハ驚き。扱打せん
と思ひし。備の下女の顔又赤馬のとし。絨子の靨。鬼のどし
家内の者。壹人として異形あり。扱ハ大とある。おれ
怪異あり。か所時ハ仕損じて。武士の名ハ耻し。と思ひ。直
小其座を立。奥の居間より。襖をき。切て。枕より。眼を困て

物のもつは休やすまり女房にやしと夫をの顔色がんとくの常あらざるは詞ことばもく
ふしたれは傍かたわらより心こころ地ちのいろ色いろく同おなじく久く番ばん眼まなこをもあらはせり退ひ
く一時ひとときをう心こころをしづめ眼まなこをひき見みしと家内うちの人ひとの款くわん常じょう体たいのく月つき
もておしも奇怪きくがいの事こともし初はじめ異い形ぎやうもあらはし終しゆう日にちの勤きん勞らうも
殊ことも冬ふゆ熱あつの時ときありし心こころ熱あつ上うへ達たつして斯かく見みしや其その時ときも女房
をて手て打うちませば狂きやう人にんの名なをととるへありしをよく思おもひかせり他ほかの
人ひとも亦またあるまの更さらの有ありれば慎しんむべしと久く番ばんのちよ人ひとの語ことばもまま
一加い茂しげ川の西にし岸ぎし三さん島しま辺へのその以も幣はしは任にんしす乃のありしは夜よる
ハ川が千せん多た多た多た帰かへく久く番ばん系けいの任にんあらずか千せん多た多た多た
お始はじて知しりたり

一むりの高たか貴きの御方ご方も崎さき系けいの妓き館かんへあらはせり。緒お候こうも
ても吉きち系けいならどく通とひあひしとぞ高たか貴きの御方ご方もかるは花はなや
あらずあらずみりしは後こう世せい着ちやく移い越えつあらずとくもは里さとあらどの
捨すけの衣えはたるや也や。故こ女によもそののどた才さい色しき並ならむは故こ女によも
三さん都ともの一いつ人ひともあらはせり。余あらはせりと及およぶは終しゆうの二に三さん十じゆう
年ねんもあらはせり。故こ女によもあらはせりと卑ひ賤せん乃の風かぜもあらはせりと也や
し。昔むかしハ西にし行ゆき。一いつ休やす。頼たの朝あさ。為な兼かね。わらどく人ひともあらはせりと捨すけの衣えも
し事こと形かたち史しの顔かほもあらはせりと也や。遊あそ女によハ上かみ品しんからるも下した品しんも
るも一いつ統とうの皆みな徽き毒どくやらんは也や。一いつ度たび交まひをもあらはせりと人ひと鼻はな筋すぢ同おな音ね
聲こゑもあらはせりと中なかつ人ひと以上いじやうの假かり初はじめも戲あそびをもあらはせりと也や。成なりまり

一近死幸心しんごとより終しん其傳釋しんハ聽き元げん多た三百人
五百人い及あ最さい初しよ成じやう石田幼平いしだのうへいと云い此人の時ハここのときハはいふいふ
一いくく後ご子し成じやう堵と菴あんと云い俗ぞく稱しやう成じやう時とき嘉か在ざい唐たう門もんと云い此こ堵
菴あん乃な時ときより大だい小せう終しん門もん人にんも多た多た。法ほふ所しよ小せうくく傳でん説せつを余
も二に席せきを講かう釋しやく成じやう聽き王わう玄げん殊しよ勝しやうの事こと小せう益えき多た講かう説せつを
堵と菴あんのの子し成じやう道だう二にと云いて此人ここのしん才さいを師し小せう勝しやう王わうく大だい小せう終
乃な三さん都とも小せう其き學がく館くわん成じやう成じやう乃な小せう心しん法ほふ成じやう學がく也なり其き學がく館くわん成
某たが舍しゃと云いと名な付つく系けい小せう四五四五ヶ所ヶ所も其き學がく舍しゃあり。婦ふ人にん小せう兒
ああいいの再さい入にり安やすく説せつ説せつせせく。孝かう身しん忠ちゆう信しんののより家か業ぎやう商
慶けい家か老らう儉けん幼ゆう農のう業ぎやう耕かう作さくののより小せう高かう才さいを近ちかく教かう中ちゆう成じやう小せう是

小せうく中ちゆう惡あく成じやう成じやう肉にく也なり此こ傳でん成じやう一いより家か屬ぞく也なり一いより
人にんがくああく小せう兒に又また母ぼ成じやう教かう成じやう事こと成じやう幼ゆう王わうと云いて小せう兒にと精しやう
いいををすす小せう成じやう人にん酒しゆ具ぐ小せう醜しゆう也なり子し代だい小せう縁えん小せう篤とく實じつ謹きん厚こうのの行かうい
小せう成じやう才さいも余あま常じやう小せう益えき多たく又また及ある。但た生せい高かう才さい小せう教かう中ちゆう成じやう小せうハ
彈だん字じの頓とん悟ご小せう似にく事ことありて女に奇き僻へきの病びやうも入いる小せう也
只ただ一通いっとうの傳でん成じやう也なり平へい穩えん正せい尚しやうく大だい小せう世せい教かう成じやう助すけけ人にん間かん小せう益
あり學がくなり
一い近ちか世せい成じやう家かの不ふ如にょ法ほふ多たし。宦くわんより嚴げん受じゆ得とくく小せう兒に不ふ
止と是こゝを一い子し成じやう家かををれれむ九きゆう族ぞく天てん小せう生せいるの結けつ成じやう信しんして父母
たたる者ものの天てん乃な小せう生せいる事こと成じやう欲よくして。是こゝより乃ないいく道だう成じやう也なり記き

其法我も信公しんこうとて有ある毎まに小こ剃し髮はつ出で衆しゆサの信しん成じやう
其その成長せいぢやうの後のち果はつて成なるる法はふ衣い我われ希まれし寺てら院いん小こ任にん職しやく
すれども最初さいしよより合あ点てんあり物もの取とりたる小こ一いつ何なにぞ小こ女にょ犯らん肉にく
食しきの人ひと情じやうやがごとくひそふ毒どく我われ賤せんえ魚ぎよ肉にく我われ食くふるなり。是
初はつ小こ又また廿にじふ五ごのれり欲ほつする毎まに我われ外がひにに小こ終はつ小こ子し小こ信しん
乃すなは罪つひ成じやうるる一いつめ。仏ぶつ法はふ少すくハ破やぶ戒かいの罪つひ小こ臨りん一いつ心しん歎なげくべし
憐あはむる命いのち不ふ使ぢ乃すなはちちかめ

一人生識じんしやく字じ憂う患わん始はじめとて東坡とうは乃すなは言い業ごうありる誠まこと小こ名な言いとて小こ金きん
一いつ少すく一いつ小こ心しん智ちありる色しきハは多おほし程ほど憂うれひ多おほし海うみ絶たつ海かい乃すなは漁り又また
難たが者ものの每ま念ねん每ま想しやう小こ一いつ生せい成じやう終はつるハ人間じんぎやうの仙境せんぎやうとて小こ一いつべし

一萬葉集小

樂らく一いつハ夕ゆふ顔がほ極ごくの下した涼すずと又また節ふしハはとと小こ妻つまハはととのの一いつとて
け歌うた滅めつ小こたのの一いつとて真ま境さかい成なるる又また余あまガ友とも俣ま菅すげ禮らい御ごりり癸みづ
丑うし孟もう冬ふゆ遊あそ永なが山やま山やま中なか作つく小こ 西にし日ひ山やま遊あそ遺い俗ぞく紛ま轉ま知し估か畢ひつ議ぎ
耕かう耘うん射しや麋み籬し畔はた厨く皆みな富とみ塚つか栗くり巖いわ頭かぶ髓ずい亦また芥か牛うし跡あと縦たて横よこ連つら石いし
我われ機はた鳴な断た續つづ咽のど峯かみ雲うみ荆せき公こう既すで敗たふ温ぬる公こう罷たふ此こゝ事こと村むら氓まう総すべ未な聞き
此こゝ待まち感かん慨がい餘あまりり河か皇みかど危あや角かく世よ外がは小こ仙せんをを学まなぶる小こ一いつとて思おもはる
一いつ釋しやく氏しの学がく近ちか死し以もちて本もと教くわう寺てら宗しゆの信しん最さいとて勉つとむる他た宗しゆ小こ勝かつ是こゝ
ろろとて一いつとて是こゝハ所謂しよゐん衣い食しき足たり而して後のち知し禮らい節せつとて小こ一いつとて教くわう一いつとて本もと
願ねん寺てら宗しゆとて女にょ犯らん肉にく食しき随ずい意い小こ一いつとて世よの中なか乃すなはちち心しん満まん足たり一いつとて

英雄豪傑武夫勇士詩歌の迹多し。されど通学成かゝる
詩歌風流成りかひも多しとて

一 東の一禅僧長衣小袴とて檀越小金子若于成勸進して系
へ登りて途中あり盗賊小逢ひ。金子成奪りて國許へのり
りけり。海もあり。毎月あり。系へ登りていづれも
返り居り。系あり人のいふあり。月あり。久安系小返り
り。尋り系。彼僧答して。志あり。のりあり。舟小和歌一首を
よき。是中。公成。かゝるむりあり。海も乃。面目も無く。左系
乃。費用も。是。系。の人間。て。系。ハ何と。いふ。し。と。ハ
苦。の。海。成。し。が。系。深。け。神。成。り。か。類。件。は。系。浪



素言
印

とひひたるゆを系の人た小感していつけりきわむ事たりとて。公
要人の中けりしを借り借り。皆々感心して又系乃人あまの長
老の金の系系都々々勸進して終小長志と成り海もせり。終
り遠くぬ事として人の物語りして傍の存る志きりり

一余り家少く得取の舎せし時小穀小極題成りてよと合々々
韓信跨あき成るるとりて成り丹居士

東終小海とむるた山水かひて本系下々々々
世の教りも成りて了た歌と座中稱いれけ居士和歌乃達者
ゆとむ人なり。和歌仕俤少しとの風とよまよとて巧うあるなり

花中

花咲く見し人夏野の鹿鳴草うけに系仕並枯とてん
ちと詠し人あまあうた歌なり

一泉別岸和田より二三里許奥乃山小塩の湯ゆる谷川を。奥別
會津の山中あり海より三十里小瀾ゆる地小塩井ありと塩
沢ゆるし云。唐土あり北地ちの海遠たふ小塩井ありと成りり
泉別のもの海も遠く遠く塩とて塩ゆるとよ

一余り年の時より云老子成好とて數十遍讀と堂て經解を
見著し並々り。莊子あ古今老莊と並へ稱されども意の唱を
る所是ふとて余是成好とて只文章の響古小ハ莊子成續

華葡萄忍之類皆在旋一入乃陰莖乎も在旋の邊何り

一内經の説はよきと人の一息夜代呼吸一萬三千五百息一呼

ヲ合セテ 是成三百六十合せく人の一年の呼吸四百八十六万息

人一生成る年少く一生の呼吸四億八千六百万息也。されど

天地ハ一年小終ハ一息一萬三千五百年成天地の一息夜と

を合し。一萬三千五百年成三百六十合せく天地の一年とし

是成又る合せく天地の一生とを合し。されど天地乃壽余ハ四

億八千六百万年とかる也。奇論一矣成を合し

一蜜製の至精乃顕微鏡少くも時ハ油ハ丸た物の多合たるこ

水ハ三角なる物の多合たる也。又一滴の清水成針の先もはる

顕微鏡少くも其水中小種も無量の虫類何れも牛の如き

ものも何れも鯛の如きものも何れも蛇の如き何れも鼈の如き

ものも何れも皆各水中小遊物と云。是多れも成思ハ至微の

事人智の考へ測る能くざる所なり。然れ顕微鏡の力に不及

所小其真も亦一。されど至大あるものも亦如也。人智乃考

へ測る能くざる也。されど天地ハ丸た物なり。されど物夥多

集り多合して水の如く流る成巨大の人よりして只水なりと知り

居るも傍より顕微鏡少く此水ハ丸たもの集り寄合して流る

かりと妙法し居る所無しともいへば。然れ天地間に日月星

夜各山大川鯨鯢龍象の類何れも一滴の清あり中も何れ

平の...鯛の...蛇乃...鼈の如くあるものと云ふ人ありし
りる...次。是れ論まれば佛の天眼成りて清水成りて水
のま類漉せしむ不み...の...実の...近し。鄒行り赤縣神列
乃如た...の九つ...の...量乃小ある成男...命し。余折く
既脱成強して小智の...の膽成破る

一江列聖田の祐菴ハ名言た殺人あり。味成りて...
庭あり車下乃鯉あり...
何...成辨せり...
て下僕小湖中...
僕遠く汲...
湖中

それの...の水なりと欺く。祐菴を水成飲て是ハ湖中の
水...下僕...欺く...
事...溜瀝の水成辨...
又系師...
又余...
乃...
南...
の...
鯉成食...
眼耳鼻口皆各性の長...
水

分し大筒の一日千発ハ殆ど子なり又同玉小田氏の嫡子ハ三
百目あり拾八丁の遠所一日小百発して十八町の町敷を以て
付たるものなり是余が彼藩に推入一時の事なり

一余十九歳にして郷土に如糊口の事小苦し且老母小仕て母
の公勞し玉に事成せき又家貧し其ハ書成求る事能はず師
小後ふりつり次其後ハ天下漫遊する事前後四度ありて
初令五年餘それより余不帰して日夜治療小奔走し教授
小羅勞し學問の事多し著述の功成飲たり付小初かより
甚多病小しと瘧とる事ハ主家を死たの事死小近を病
患ふること四度時疫傷を冬一度を介一月二月控小外を狂病

コノ四

ハ毎年病する事多し三十八九才よりハ身を喘息の病小かき
筆硯練去の事成廢絶也此喘息乃苦悩の爲小學問乃志も
青雲の志も皆消し去りて世に成遁き生れ去りて
乃小八歳り下きり入生終ふる事小思ふ事小何れも公の
事小成る事小なり

一江戸小一種の輩カ何リ多集成脚指と名付く其身俗小して
又雅なる人ヲ尋ぶる事小何れもよく人情の事曲り
をい世の變化成述する事小妙に入りて志も小なりみ成事小の
事成る事小ある憂鬱の事小成る事小鮮し事小一両分

成事小

〇十五

居んくけがまればさしたんく喰ひ

ともまれで二島の后むれさうと

そと能くいよまされ くと最暇寺

是等の教彼集ふ多し

一狂歌を昔よりある事あり

暁月きんげつの毛乃けむくしとまよしとる歌とくふふ峠たけ也

又 多しおほしく年の暮れ成るれば若く石炭系極多の終しり

借かりふもとも

暁月きんげつの毛乃けむくしとまよしとる歌とくふふ峠たけ也

室門系五斗成傳ふとて延のりふ

定家さだいえら力の不ふく成なり又また人として石炭せきたんゆゆり小割こわりてこまされ

かると草紙くさしふんふんとく近世しんせい浪花ななの丘柳かたやなぎ善ぜんの狂歌きやうかより中流ちゆうりゆう毎

の名成ななゆゆく狂歌きやうかの名大なほふ世よふ鳴なるる後のち浪花ななふふ芙蓉ふよう花はなのり

近來しんらい江戸えど盛さかふふなりと四方よも赤良あかああ成なりるる狂歌きやうかの名家ななふふ

し江戸えど乃の人の作つくありとて人の語ことばををし申まをす

婦めむむの延のびゆゆりふふるる小夜よ遠とほの婦めりりるるか

一笑いちごう成なり發はつををへし。京きやう中ちゆうも余あまり友とも小星せうせい池いけとと人ひとありてああ狂

歌うたををよよむむ。い人の物語ものがたりは狂歌きやうかハ益えき公こう俸ほう成なりるる。理り察さつ俸ほうと狂

歌うたの悪道あくだうなり古人こじん老らう人の賛さんふ

けりしとてを短みづかた河かををふふ己おのれか齡よらいのたけふふるるをを

あといひし人彼理震傳なり

あふれと何思ひらんけあふれとてえさるい今かりたり

やど作らひよかろ庵しと云きし。がにとて思ひし。け星地の狂

歌多く笑しう今ふ志きなり至一二首小詠史しりよ題めて致

十首五りし中よ

此所望の公茂季礼あえし疾^{オウ}里^{オウ}暮^{オウ}の愛^{オウ}意^{オウ}ふりけらる

吾^{オウ}酒^{オウ}の盡^{オウ}四^{オウ}をわらさふあれは范^{オウ}睢^{オウ}て負^{オウ}けちや^{オウ}祿^{オウ}で勝^{オウ}

を我の下僕服着成共一腰^{オウ}盗^{オウ}まて出奔^{オウ}しる朝

今よりハ何れか思ひたら用山人の公乃真れきうあふ

人乃火災^{オウ}不^{オウ}達^{オウ}て誓^{オウ}しかり住居^{オウ}しるる^{オウ}尺^{オウ}廻^{オウ}小

やうて我成は立鳥帽子うり住居きりハそにさるのうらな

一古昔ハ連歌^{オウ}のく狂^{オウ}するも多し。画本大和比事小知てる。和列

の傍れ飛^{オウ}香^{オウ}味^{オウ}噌^{オウ}成^{オウ}大^{オウ}に^{オウ}敵^{オウ}ふも多し。きりよわくう小

もて系る^{オウ}いさり味^{オウ}噌^{オウ}とヤサ小大に敵より^{オウ}いさる。みるの

系成や過てまばらん。西^{オウ}の^{オウ}津^{オウ}の^{オウ}玉^{オウ}小^{オウ}の^{オウ}脚^{オウ}の^{オウ}付^{オウ}尾^{オウ}の^{オウ}手^{オウ}に

うら板を根成さし吾^{オウ}らも成^{オウ}えり。賤^{オウ}が板を成^{オウ}奴^{オウ}をぞ^{オウ}娘^{オウ}ふ

とつひらう小を元。月ハ津^{オウ}き^{オウ}ぬ^{オウ}ハ^{オウ}小^{オウ}れ^{オウ}と^{オウ}思^{オウ}ふ^{オウ}も^{オウ}ぞ。と付^{オウ}る

京^{オウ}極^{オウ}の^{オウ}伊^{オウ}勢^{オウ}の^{オウ}脚^{オウ}の^{オウ}付^{オウ}小^{オウ}見^{オウ}れ^{オウ}亦^{オウ}小^{オウ}登^{オウ}る^{オウ}成^{オウ}えり。はあしと

様より野^{オウ}本^{オウ}に^{オウ}登^{オウ}り。とつひらう小見^{オウ}え^{オウ}り^{オウ}て。大^{オウ}の^{オウ}やう

なる法師^{オウ}来^{オウ}れ^{オウ}むと付^{オウ}る。そが義家^{オウ}兵^{オウ}任^{オウ}の^{オウ}衣^{オウ}川^{オウ}の^{オウ}連^{オウ}歌

五
言



二
七



二
八

又梶原朝の鞠子川乃連歌やと昇因の妙皆乃乃秀
し成るが如し。近世万治の禁裏炎上の時云卿等遊送玉
ひし中水谷殿。風早殿成呼々々。風早と成り思ふし
多の火水。と成りし。清水谷と成り焼水跡と成り。と成り
あひし。郡山候とより二三代以前の候也。近侍殿の連歌は
内門人なりし。何より河上系ればりし。小糸と成り。折ふし
取降る。五月雨小中。と成りし。みのみ守。と成りし。と成り
ふえり。何より河上系ればりし。と成りし。と成りし。と成りし。
是等の類と成り連歌の狂体なり

一祖徠先生病ひ甚しき時より諸医平を治ら終しうが望月

三英を招うれし三英診して先生の病既篤一我侑抄工の
よくもる取よ何とと辞せし祖徠も打らあつき今都下
の医師數千萬を以るかどふるとつとも危き時臨して死
生を記すべき人ハ稀なりむらしまりる医学をる人もあく
なりぬとバ術も抄きなり。只子のと文学をる好み死生ハ余
なりひとまきと頼むなりといわれし三英きて先生昔を
いじりりのみ殊は明の代ハ医も多し明人の中ありいを誰
どきものを得る先生の死生を記しうへき試みひり祖
徠志を思案して薛立齋が如き者を得可なりと成り時
三英思ふ手を打る大よりひ先生ハ誠は天下の豪傑よて

学問文才誰何つよく當らんさまと深く学びたいは
更なるかろのなりとふべし三英不才なりとつども三育
ふどきふ譲るべうば薛氏がどきうて足りとしうとく
尚今の世とつとも其人は多しうらば何ぞ医かきを
憂へん先生の見ゆ所ひくしとて笑ひぬとぞおのりい
望月の著述の書の中めても見たりしるけりき嗚呼徂徠
先生豪邁の才を以て博く学問し殊も医の子として
其学も頗る涉り医方小言をぞも著述もけり素問
の評をい見識中し醫師の及ふ所ふらば然れども世俗
よいたる火燒兵法烟水練とふとの用も立がどきとく

一世間おろく少し儒学の力ける者の心より医学を甚心易き
るよ思ひ練よ一両月打くりて医書ぞんばとて讀ば療治に
忽ちよ出来るやうよ思ふ者あり名高き大儒先生物徂
徠亦必簡のどき人も斯けりしと思へる余も弱冠の頃
ハ左思ひしく是は客氣ある故あり医術をど精細微妙な
るものいけらば其極を言ひて其人忠恕の二字を解し氣膽
人は勝れ又其心慎謹丁寧よく扱世栄を肩とせむ且日
夜心を医事よ用ひ數年の工夫を歴るふけらば此道の
奥妙に至ると可ふべうけ余も此むつりしき更を知り後ハ
儒書を讀むをやめ其外詩歌風詠の更とつともふのく心を

移さば造次顛沛きうしえんぱい必かならず心こころを医い吏し置をく是こゝを我われ分ぶん上じやうの
仁になりし思おもふ又また是こゝ我われ心こころ術じゆつの本ほん領りやうしておのつゝ實じつ著ちやうの
地ち三十さんじゆ以後いご我われ見けん識しきの術じゆつ高たかくなりし客きやく氣きづるは分ぶん
外がいの吏しのこゝを言いひて我われ見けん識しきの高たか下げを誤あやり居ゐるものこ
一天いつてん明めいの平へい安あんの大だい火かは是こゝを狂けうを病びやうる人ひとの此この騷さう動どうよりて
狂けうの平へい愈いよしたる有ありし此こゝをどろきおて新あらたに狂けう人ひととなりしハ
多おほかりしが平へい愈いよしたるハ珍めづしきとあり都みやこの吏しは大だいあ
る害がいをなほるものハ又大またある利りる有あるものあり

北窓瑣談後編卷之四六尾

北窓瑣談跋

嗚呼先生之於醫發蒙解惑以利
後世者其高論至言著述備焉先
生嘗自以為宏博未足東西漫遊
以弘聞見其趾所歷勝區陳迹異
物奇事莫不筆記而斯編其最晚
成者矣先生之於學該通精研不

苟守腐說故其所發確乎有據炳
然可觀所以游覽之際從容之談有益
於人也諺曰叩一知萬觀斯編者其必
有以知於先生之溫矣

門人 阿州 橘春菴謹識

此書先主... 北窓... 東西... 卷之...

著述

橘南谿翁

校正

男 芳谿

畫工

一 柳嘉言

筆工

山田野亭

文政十二年己丑正月發兌

京都烏丸魚棚下 菊 屋源兵衛

同 寺町御池通下 三木 太郎右衛門

大阪御堂筋瓦町 小刀屋六兵衛

同 心齋橋通博勞町 河內屋長兵衛

同 心齋橋通久太良町 河內屋平 七

書林

